

- 2005年 読書委員が選ぶベスト3 (3) 新谷尚紀 国立歴史民俗博物館教授
- (1) 鈴木貞美『日本の文化ナショナリズム』(平凡社新書、860円)
 - (2) 佐伯真一『戦場の精神史』(NHKブックス、1120円)
 - (3) 三浦正幸『城のつくり方図典』(小学館、2800円)

日本論や日本人論の流行はいつも危うい。『菊と刀』、『日本人とユダヤ人』等々。伝統文化論もやはり危うい。1990年代以降、加速度的に進む国際化と異文化交流。そんな中で日本の伝統文化の見直しが叫ばれている。しかし、そのような熱情や流行には科学と実証の熱冷ましが必要である。

(1) 「伝統」と「歴史」を創作した「あいまいな日本」の近現代史。(2) 『葉隠』や新渡戸稲造の武士道が幻想と虚構であることの論証。(3) 望楼型から層塔型への天守閣の変遷と城郭美を支える技術と技能。

2006/01/08 毎日新聞 (ローリー文化)

文化といふ劇場

最近出た『日本の文化ナショナリズム』(鈴木貞美著・平凡社新書)も、天皇制

つくられた「伝統」の数々
ナショナリズムとの親和

世の中、「あること」が何年ぐらいつつ続すれば、伝統と呼ばれるようになるだろうか。

そんなことを考えたのは、「戦後60年の原点」シリーズ「天皇の人間宣言」で天皇制の伝統について取材したからだ。原武史・明治学院大教授(日本政治思想史)に尋ねたところ、高中祭(まつり)の主要部分をはじめ、明治時代になって多くの伝統がつけられ、万世一系のイデオロギーを支えることになったとの説明だった。敗戦の時点で80年ほど、現在までなら約140年の「伝統」である。三種の神器がともかくも引き継がれ、男系天皇も続いているのを理由に天皇制の伝統をこのほか強調する立場もあるが、千数百年や2600年の伝統といった表現をナイフに受け取ることはない。

が明治になって「発明された」と力説する。本書はほかにも、つくられた伝統の興味深い事例を挙げる。「昔から、自然を深く愛好してきた日本人——このおなじみの文句は、日露戦争(1904-05)後の世の中のムードを基礎に生まれたという。戦争の破壊的な暴力など「近代文明の威力に恐れとおののきを感じた人びとの心情を背景に、「自然への愛」が一種の合言葉になったというのだ。そうした心情自体は日本人の中で連続とはぐくまれてきたものかもしれないが、言葉として表現されたのはこの時からだった。そして、そこには、日本人は他の民族とは違うという意識が濃厚だった。

伝統が容易に、特にナショナリズムと結びついてつくられてきたのは他の国も同じ。単に継続しているだけの精気のない伝統も問題なら、感勢よく自己宣伝する伝統も要注意だろう。【伊藤和史】

発明された「忠」「ワビ・サビ」

日本の文化ナショナリズム

鈴木貞美著 平凡社新書・九〇三冊



グローバリゼーションとかポータレスという言葉がはやっていて、人間の営みがいまや国境を越えて、全球規模に普遍化しているというわけだ。そのくせ、他方では民族主義、ナショナリズムもたかまり、その激しい衝突が起きている。

ナショナリズムは、もちろん政治や経済や軍事と結びつくものであるが、その根底には文化意識の展開がある。宗教とか、生活様式とか、「伝統」についての考え方が、これにからんでくる。

日本では、近代国家として出発した後、圧倒的な力をもち従ってグローバルな存在に見える西洋の列強と対抗するため、文化ナショナリズムが大いにたかまった。本書はナショナリズムの文化の問題を世界的な視野で扱っているが、中心は明治初期

すずき・さだみ 1947年生まれ。国際日本文化研究センター教授。著書に「生命」で読む日本近代」など。

から現在までの、そのありさまを語るところにある。西洋の物質文明に対して、日本では高麗な精神文化の伝統が強調されてきた。だが著者は「伝統の発明」理論を見事に適用し、その裏面を説く。たとえば万世一系の天皇家に対する「忠」とか、新渡戸稲造らがひろめた「武士道」の精神とか、「ワビ・サビ」「幽玄」の美学とかは、日本古来の「伝統」といつよりも、じつはナショナリズムの要請に応じてあらたに「発明」された「伝統」であるという。

しかもこの趣くどくどく、この「日本的なるもの」にグローバルな普遍性が加えられることになる。著者・寛克彦の、神道の神を「宇宙の大生命」と説くような理論が生まれ、日本を中心とした「大東亜共栄圏」の理想へとつながっていく。日本文化の近代化を西歐化と考えるのは、錯誤だと著者はいう。

じつに面白い。著者いろいろあるが、吉川英治や岡本太郎まで登場させられ、おそろしく多彩な内容である。いわば日本人の文化的自我像が総点検されており、さて自分が何に属しているか、という自己点検にも読者を導く。

〈評者〉 亀井 俊介 (米文字・比較文字者)

山口文憲の

解体新書

いふなれば、「伝統」のパラドックスだろうか。ご存じの通り、私たち日本人がこれこそ日本の伝統と感じているものの多くは、実は近代の発明品にほかならない。

したがって、その時々都合でいかようにもなる。女性・女系天皇帝容認論に危機感を持つ反対派が、「万世一系」の伝統を「万世男系」にしようとするのも、あるいはその一つかもしれない。

それでは、「自然を愛し、自然と調和して生きる日本人」はどうか。あるいは「武士道」はどうか。これらも同じく、明治以後に広まった考えにすぎないのか。

こんな疑問に逐一答えるのが、鈴木貞美著「日本の文化ナショナリズム」

「伝統」形成過程示す

「日本の文化ナショナリズム」

(平凡社新書・903円)。著者は1947年生まれで、国際日本文化研究センター教授などを務める。

一読すれば「日本の文化について、まったく新しい見方がひらけるだろう」(はじめに)という触れ込みも、あながちうそではない。

国民国家の成立とともに誕生した近代ナショナリズムが、本家のヨーロッパではどんな形をとったか。そして明治日本は、それをどう受け取り、どうわがものとしたか。そこを入り口に、論考は国民文化の形成の過程へと進んでいく。



シなど

歴史の創造、国語の創出、日本文学と日本美術の「発明」のくだりは特に興味深い。話の間口を最大限広げながら、それでいて網羅主義におちいついていない点も、本書の特色の一つといえる。

さて、明治日本のナショナリズムを一気に高揚させたのは、日露戦争の勝利。しかし勝利の陰には、国際金融資本の大きな力があつた。

その立役者の1人のユダヤ系銀行家に光をあてたのが、田畑則重著「日露戦争に投資した男」(新潮新書・735円)。ナショナリズムの熱狂の背後には、冷徹なリアリズムがある。

(エッセイスト)

シなど